

# 知床半島へ

2005 - 05 - 13(金) ~ 06 - 02(火)

五月十三日(金)午後八時。名古屋港発。

十四日(土)晴れのち曇り。

午前三時過ぎ目覚める。船の揺れが大きい。船室のきしみ音がやかましい。TVの天気予報で現在の各地の波の高さが表示される。関東沖から東北南部沖は三メートル、仙台から苫小牧までの沖合は二メートル。船室は廊下の突き当たりで最前部。船首のデッキに向かって小さな窓が一つだけある。ここは操舵室の上なので「夜は外へ明かりが漏れないようにカーテンを閉めておくこと」と注意書きがある。

起きあがってみる。立つと体があちこち勝手にふらふらして危なっかしい。横になっている方が気分も楽だ。有り余る時間のために用意した文庫本を読む。横たわる頭上の明かりは十分に明るい船の揺れのせいで小さな活字を拾うのは難しい。ハムレット荘のドルリー・レーンがはやくも「犯人ははつきりしている。」と述べてサム警部たちを驚かせるところで、気持ち悪くなって本を手放す。船は鋼鉄板をしつかり溶接して組み立てられているのだろうが、それでも、船室中からはげしいきしみ音が出ている。朝、明るくなって窓の外を見ると、船首では波しぶきが高く上がってたびたび緑色のペンキで塗られたデッキを洗う。

昼になって初めて食事をとる。食堂の客が洋上を眺めながら隣の連れと話している。「それでも朝に比べるとだいぶ波が低くなったよ。朝は

白い波も立っていたからねえ。」午後五時、仙台港着。同八時発。

十五日（日）雨天。 苫小牧港着。 10:45

（新冠町郷土資料館） 静内町郷土館

静内町アイヌ民俗資料館 百人浜キャンプ場

苫小牧市内でデパートを探して片手鍋を買う。新冠（にいかつぷ）町郷土資料館を探すも日曜日のため各施設が休みで聞くところがない。街にはほとんど人が出ていない。病院も本日休診だった。中にはいることはできた。何人かの人白い診療服を着て働いている。二階で聞くと「ここから見えるかしら。」と窓から探してくれる。見当がついて行ってみると休みだった。ここは日曜日が休館日なのだ。静内（しずない）町周辺は馬の産地。道々にウマをかたどった牧場を示す看板が目につく。

静内町郷土館には底の尖った縄文早期・前期の土器がある。

パネル、「駒場7遺跡（所在地・静内町柏台、調査年・昭和55・56年〔1980-1981〕）」

駒場7遺跡は、北海道縄文時代早期（およそ8000年前）の集落を研究するうえで、重要な遺跡です。住居址が二十四軒確認され、これらの住居址からは、貝殻で文様をつけた「魚骨文土器」等が出土しています。貝殻文土器には、北海道西部で出土する底が尖ったものと、北海道東部で出土する底が平たいものがあります。この遺跡では、東西両地方で出土する土器が混在しています。このことは、日高地方の縄文時代早期遺跡の特徴です。」

線のあいだに点を置いた文様（図321）。「遺構外出土」と表示されている。二連の突起が四つあるが、どうやらすべて復元の際に補修されたものらしい。

パネル、「中野台地A遺跡（所在地・静内町清水丘

調査年・昭和57年〔1982年〕）」

中野台地A遺跡は、北海道の縄文時代前期（およそ5000

年前）を代表する遺跡です。住居址、土器製作址などが確認されており、これらの遺構からは、総計10,000点をこえる遺物が出土しています。



出土遺物の多くは「静内中野式土器」で、命名の由来は、中野台地ではじめて発見されたことによります。静内中野式土器は底が尖っていること、土器の素材である粘土に繊維をねじってからみあわせたより糸がまぜてあることなどがおもな特徴です。」

曲線をえがいて底の尖る土器（図 322）。この下部は底近くで一旦ややふくらんでいる。尖った底まで出土片は続いているのでこのとおりの曲線だったのだ。口辺のわずかなすぼまりがこの表情に呼応する。口辺と胴の下部をおさえてしぼったか。あるいは、胴をおしひろげたか。このかたちが何かに役立ったのだろうか。

縄文のくつきりと残る土器（図 323）。図の正面で口辺からするどくどくがった底まで出土片が続いている。背後はほとんど失われているようだ。このように底のとがった容器は底からつくりはじめるはずはなく、さかさに積み上げていったにちがいない。それでも、最後のとんがりはむずかしそうだ。うえに開いた穴が小さくなってきたら、生乾きにしてから平たく敷いた織物のうえに横たえる。口から片手を入れて、内外から両の指先でとがった底をつくる。口辺に波形を乗せたい場合もこうして横たえて作業したらいい。東北の早い時期にほとんど円錐形にとがった容器があるのはこの作業のためかもしれない。それにしても、このようにしてまで「とがり底」が必要だったのは何のためか。

静内町アイヌ民俗資料館では、にぎやかに中国語をしゃべる人たちと一緒にあった。入り口近くに鳥捕獲のための「落とし」が展示されている。籠に閉じこめるのではなく、鳥が籠の中のえさにつられてのぞき込むと体を挟み込まれる仕組みらしい。どんな風に作動するのか案内係の男性に聞く。いろいろやってみてくれるがうまくいかない。どこか組み立てが違うか、何か足りないのかもしれない。かなり大きな木造船が復元（複製）されている。イタオマチプ（板綴船）という。生活民具



323



322

の中に揺りかご（揺り板）がつり下げた。それを中国人の女性二人が見上げて何かいいながら笑っている。「送り儀式」に使われたとみられるエゾオオカミの頭蓋骨がある。これはよそにはほとんどなく珍しいのだという。この地域は古くからアイヌ民族がたくさん住んでいて、特に道内の東西アイヌ文化の接点として注目されているところだという。今、そのアイヌの人々はどうしたのだろうか。昔、次第に和人が増えていった、いくらかは混血も進んで今では人々の区別がなくなつたのだろうか。それとも、ほとんどのアイヌ人は他へ移ってしまったて姿を消したのだろうか。（あとで静内町のホームページ見ると、アイヌ古式舞踊「イウタ ウポポ（ヒエまきの唄）」「エレムン コイキ（ねずみ捕りの遊び）」「タップカル（男の舞）」「ポロリムセ（輪踊り）」などが国指定の重要無形民俗文化財になっているという。そうすると、少なくともこれらの文化を伝える人々は今でもいるということだが。）様似（さまに）町に入って出光でガソリンを入れる。

十六日（月）曇り空。寒い。

キャンプ場

襟裳岬

帯広市

#### 四駆ランドキャンプ場

少し後戻りになるが、東海岸に出て岬を目指す。左手に海、右手に丘陵が続く。霧が出ている。早朝というほどでもないのに出会う車はない。岬の町並みをすぎると坂道をあがって高い崖の上に出る。下は太平洋の荒波。強風のなか、沖から寄せる大きな波がしぶきを上げる。空には暗い雲が走って、いつもの沖合のわずかな明るさも今は見られない。うしろにはなだらかな丘が幾重にも続いている。丘に樹木はなく、すべて褐色に枯れた笹原だ。そこをたびたび風が渡っていくので笹原は波のように揺れる。車外に出てあたりを眺めていると、遠くの路上に笹原からキツネが出てきてこちらを見る。口に何かくわえていて、隠れるところを探すように動き回る。こんなに民家に近いところにもキタキツネが現れる。

「コーヒーが飲めますか。」と聞いて土産物店のテーブルに着く。「今

日は風が強くて寒いくらいですね。」というのと、「きのうからたいへんお天気ですよ。しばらくこんなことはなかったんですがね。」と店番の男性がいう。眺望のための広いガラス窓から下をのぞくと、さきほどの荒れた海と笹原の一部が見える。昨晩は雨風がひどかったようで木製の太い窓枠の下段がぬれて、そこに何枚ものぞうきんが添えてある。

帯広に向かっている途中、車はたびたび濃い霧の中を走る。これが「東部北海道の海霧」か。もっともあれは夏に多いのだという。このへんは今、冬を抜け出したばかりのようだ。どの畑も新たに耕されて耕作の準備が始まっている。こちらの畑土はみんな真っ黒だ。よく見れば濃い焦げ茶色なのだけれども、明るい黄土色などの畑を見慣れている者にこちらの畑はほとんど黒く見える。

ビート資料館。これは企業の設立した豪華な専用博物館だ。展示される作物標本を見ると本当に短い大根のようだ。昔の社会科の教科書には十勝平野の特産物として砂糖大根が必ずあげてあった。みんなそれがどんなものかあまり気にもせず名前だけを覚え込んだのだ。いつも大根の煮付けや辛い大根おろしを食べている者に砂糖のとれる大根は考えにくい。展示の説明によると、この作物は実際にはアカザ科のホウレンソウの仲間だという。してみると、アブラナ科のダイコンとは別の植物だ。そういえば、ホウレンソウの赤い根は甘みがある。どんな花が咲くのだろうかと思うながら展示の標本や写真を見渡したが見つからない。精糖の工程や栽培の目的に開花した作物は関連してこないのだ。

他に月曜日でも開館している展示館が幕別（まくべつ）町にある。幕別町蝦夷文化考古館。こぢんまりした建物は横から見ると倉のようだが瓦葺きの屋根はお寺のよう。入り口では、ちょうど係の女性が東京から来たという女の人を送り出していた。中ではストーブを焚いている。「このごろはまた寒くなりましたので、お客さんがあると焚くのです。」という。この展示館は、昭和十五年頃から吉田菊太郎氏が資料館建設を目指して資料を収集してきたもので、十勝地方のアイヌの人々の日用品をはじめ多数の写真や文書を保存している。これらは氏の死後、幕別町に寄贈された。

奥の壁面に氏の書いた文章が表装されて掛けてある。「蝦夷文化考古館に思う（全文）」その昔北海道は蝦夷即ちアイヌ民族の自由の天地であり大自然に恵まれて何不自由なく楽しく住んでいた。蝦夷ヶ島北海道は急激なる拓殖政策の強化に伴い古譚（〜）は村に町にと拓け世は限りなく発展を示しつつあるのに反し激しい生存競争に耐えられぬ同族の中には世の敗残者として家族を失い古譚を離れて行方さえしれぬものが少なくない。

又 進化向上した者は事業のためその他により都会に移り古譚に停る者も生活様式の改善に依り或は和人との混血により同族本来の姿は年々薄れ古譚は一般和人部落に変わりつつある現状にしておそらく近い将来には全くアイヌ人の姿はこの世から没し去ることであらう。斯くて先祖が起き伏し日頃意を通ずるために用いた言葉や荘厳に行われたカムイノミ（祭典儀式）も殆ど忘れられていることは誠に遺憾の極みである。また鎌倉時代から蝦夷ヶ島北海道開拓のため移入する内地の奴僕となつて重荷を背負い深い茨を分けて道しるべの役となり或は河に丸木舟を操つて交通運輸に努め開拓移民の先駆者として文字通り犬馬の勞に身命を曝す。その酬いとして与えられた品々及び熊の皮、鹿の角など物々交換により求めた諸々の物を宝として保存し又自ら作った生活必需品など之等貴重な文化財が薄れゆくアイヌ民族と共に失われこのまま放置せんか。古譚にアイヌ文化財は全く消え失せるであらうことを嘆く吉田菊太郎は一族と共に奮起したのである。

而して先祖の遺した文化財を蒐集して一堂に収め長く正しく保存することが先祖に対する饒であり、また向後の考古資料にも役立つであろうと考え先ず之等を保存する館を建設するに当たり菊太郎は資金造成のためアイヌ文化史なる冊子を発刊し之を道内外に行脚して販売す。尚家族の資財を含めても足りず残るは幕別町を始め江湖諸賢の後賛助に与り昭和三十四年深秋首尾良く蝦夷文化考古館の完成を見るに至る。以来文化財の蒐集に渾身懸命に努むるや幸い篤志家の御協力と徐ろに收容しつつあり必ず初志の目的を貫遂する信念に徹す。茲に念願するは菊太郎亡き

後の蝦夷文化考古館の維持管理は幕別町において當られるよう切に望むのである

嗚呼 思いを後世に轉ず すでに蝦夷はなく蝦夷文化館の一堂のみが往時先住民族アイヌ人居住の跡として此の地に残るのである

吾は先祖と共に蓮華の蔭から蝦夷文化考古館を見守る

合掌

昭和三十六年五月五日（一九六一年）

北海道十勝国中川郡幕別町

字千住（元 チリロクトウ古譚）

蝦夷文化考古館建設者 アイヌ人 吉田菊太郎 印

明治三十九年七月三十日この地に生る 「

自らをアイヌ人と記したこの文章から、先祖とその文化へのほとんどあこがれに近い彼の心情がよく伝わってくる。彼自身がアイヌ文化を直にどれほど引き継いでいたのかはわからない。

展示物の中に縄文土器の破片も少しある。黒や濃い色の布に刺繍をした品のところで案内の人は「女性の作った物はみな細やかで丁寧なんです。」と言い添える。刺繍糸は赤・黄・白や、緑・青・水色などの組み合わせだ。これらの色相のグラデーションはいつ頃から彼女らの趣味の範囲に入ったのだろうか。これに近いことは、彼女らが鮮やかな刺繍糸を手にする以前の古くからすでに行われていたのかもしれない。パンフレットを置いた中にアイヌ語のラジオ講座テキストがあつて、案内の人は「どうぞ。」と渡してくれる。

キャンプ場に着くのが少し遅れたので、すぐそばのオサルシ温泉というところで受付をする。温泉は午後8時まで営業というので車内の整理をすませてすぐ温泉につかる。薄暮の中をサイトに戻ってくると車のそばにキツネが立ってこちらを見ている。さらに二、三步近づくと横へることと歩いて立木の向こうで振り返る。そちらへ行く気配を見せると今度は走って少し離れた建物の蔭にはいる。そこで、こちらがそつと建物に近づくとあわてて林の中に駆け込む。

十七日（火）雨天。

キャンプ場 帯広百年記念館 浦幌町立博物館  
虹別キャンプ場

百年記念館の公園では社会見学の小學生たちがちょうど到着したところだ。まず、先生の注意を聞くために広場に並んで腰を下ろす。公園では今、あちこちに桜が咲いている。こちらの桜はソメイヨシノではなく、花は濃いピンク色だ。それに加えてえんじ色の新芽がすでにいっぱい出ているので、全体にはいつそう紅い桜に見える。

展示室の壁に早期からの縄文土器がたくさん掛けられているので、受付に戻って聞く。「写真撮影は事務所に申し出ることになっています。」さっそく事務所に行って申請書を書くとすぐに許可が出る。照明が少し暗いが、陰影の濃い写真が撮れたと思う。

図-324。 1つした細ひもを置いたデザインを本州ではあまり目にしない。下地にはきわめて細かい縄文が向きを違えて施されている。

図-325。 添えられたラベルに「口の部分が厚く作られ、二段の刺突の文様がある。」とある。平らな上下にずらぬどう。後の世ではごくありふれたかたちだが縄文の世界ではむしろ数少ない姿だ。ものを出し入れしやすいかたち。平らなものでふたをしていたかもしれない。胴には細かい縄文が一面にいていねいに刻まれる。ただ、この復元は出土部分の見定めに迷う。背後はともかく前面で見るかぎり口辺の一部だけがあきらかに古い。

図-326。 ラベル「約2300年前の土器。大型の『甕型土器』。この土器はすっぽりと土中に埋められた状態で出土した。」 口縁は、もともと整えるつもりがなかったか、あるいはこの胴のかたちによくあるように上に広くひらいた口辺部がのっていたか。いま、口縁部は摩滅したようになめらかに見える。器の表面のすべてに細かい縄文を施す。あたかも空白を残



326



325



324

すまいとするかのように。東北地方の甕棺は、これと同じように胴部全体を文様で覆うが口辺を壺型の口にする場合が多い。口辺部を欠いたそのせいかこの姿は見るからに不格好。これははじめから土中に埋めるつもりのものであったのか。

図-327。ラベル「約2400〜2100年前の土器。」

これまでの時代区分でいえば本州では弥生時代前期にまたがる。これもいくらかかたがちがうがんでいるが、それは復元時の成形のしかたによるのかもしれない。上の三本の帯は下に重なるひだのようになっている。

図-328。ラベル「約6000年前の土器。厚手で植物

繊維や小さな石を含む。底が丸く、表面に太い縄文が付くのが特徴。」これとよく似たはだざわりの土器を四国

松山で見た（、図-206、209）。そちらはほとんど真っ

黒だった。時と場は大きくちがうが、くらしにどこか似たところがあったからだろうか同じような結果を生んでいる。人々はこの容器を腕に抱えてそのたびにこのごつごつした感触を味わっていたにちがいない。

無数の破片からこの土器を復元した人は本来失われた部分を周りに接する部分と同じように見せようと努めている。縄文の波の続きを作り、似たような色合いを付ける。隣の破片にまで石膏様のものをかぶせて割れ目をかくす。そこで、もともと出土した部分がわかりにくくなる。これは、失われたかたちをよみがえらせることができる手による重要な作業だが、ここまでやってしまうと本物に似せたまがい物を作っているようでもある。

「帯広のアイヌの歴史」のコーナーがある。「十勝アイヌ関係主要年表（近世以降）」には多数の項目が細かく掲げられる。「コタンの分布と人口の推移」には十勝川流域の集落分布図と安政二年及び明治四年の各集落戸数男女人数がそれぞれ左右に並べてある。分布図で見ると現在の帯広市はベツチャロ、マカンベツ、チロトのあたりだ。しいて「オビヒロ」に近い名はベツチャロか。左上にオトフケがある。トシベツは現在



のJR駅より北に寄っている。利別川との分流点にはチヨウダという集落がある。現在の地図を見ると千代田という地名になっている。きのうのオサルシ温泉に似た名のオサウシは河口近くの集落だ。

人口についての表は集落ごとに細かい数字があげてある。全体には減少している。安政二年にもっとも人口の多い集落はビロウ（広尾）で男女計228人だが明治四年の方では地図にも表にもあげていない。両方にあげてあってもっとも人口変動の大きいのはトシベツだ。安政二年に戸数27戸、男女計141人だが明治四年には1戸、12名になっている。このわずか16年の間に何があつたのかと思わせる。これは何かの間違いなのだろうか。

過去の地名はどんな経過をたどって現在に至るのだろうか。和人が徐々に増えていって、その間アイヌの人々と共存する時代が続いたのでごく自然にかつての地名をそのまま使っていたか。または、急激な変化の中でも、為政者がアイヌの人々と関わっていくために必要だったからそのまま使ったか。または、かつての地名を残すという、日本人のほとんど習癖ともいえる傾向があるためか。これと同じことが外国のどこにもあるのだろうか。民族や文化が大きく入れ替わったようなとき、都市の名を全く別の名にしてしまうということは、外国ではよくあるらしい。

浦幌（うらほろ）町郷土館を探す。国道を走っているうちにナビの「目的地周辺」を過ぎてしまった。右手にあるはずがその建物も道もない。左に入って少し戻ると国道の下をくぐる道がある。その先には広場があつて公共施設があるらしい。しかし、そこは郷土館ではなかった。携帯で郷土館に問い合わせる。だいたい位置の見当がついたと思つてそこへ向かう。広場の左手にある丘をあがつて建物の横に車をつける。これが「目的地周辺」の左手にある建物なんだと合点して入り口に向かう。だが、確かに郷土館なんだけれどもどうも様子がおかしい。入り口は施錠されて、ガラス越しに中をのぞくと「がれきが落ちるので危険」と注意書きがある。もう一度携帯で連絡をとると、別の場所に博物館ができていたことがわかった。教えられた道順をたどると役場のそばに真新しい洒落た二階建ての建物ができている。1階が展示室で小規模ながらよく

整理された展示になっている。

一番奥に「石器と土器の文化」コーナーがある。上部がガラスケースになった個別の小さい台がずらりと並んで、ケースの中に土器が一個ずつ入れている。見学者は台の間を移動してすべてを見ることが出来る。土器の下は磨りガラスになっていて下からも柔らかい光を受ける。この明りが適度に押さえられ、拡散されているので、真上から差す光の陰を和らげる。ただし、上からの明かりが消えていたり、はみ出してうまく当たっていないと薄暗い中で下だけ明るいために異様な雰囲気になる。それぞれの展示ケースに天井のスポットライトがうまく当たっていれば台の間に余分の明かりは差さない。それで、ガラスケースのいやな反射光が生じないのだ。ここの照明は、多くの展示館がいろいろ手の込んだ明かりの当て方を試みる中で珍しくよい結果を得ている。

土器は、縄文時代早期から続縄文時代、擦文時代まで展示されている。写真撮影について聞くために二階へ上がる。応対の女性に縄文土器のことについて聞いていると、「そのことは次長が詳しいので来てもらいましょうか。」という。一階で写真を撮っているとその次長さんがさきほどの女性と一緒に降りてきていろいろ話を聞く。

図-329 ラベルに、「胴部の張り出した小型土器。口唇部直下から底部にかけて細かな刺突文と曲線文が連続的に施され、独特の幾何学紋様を作り出している。縄文時代後期の土器の様相をよく表している。」とある。意図されたかどうか、華麗な装飾。これは左胴部のように張り出してすぐ上へ絞られた姿だろう。かたちがいびつなのは復元時の手際か。口辺の欠損がそのままになったのはよかった。往時の、かたちのよく整えられた装飾壺としてこれをおもい浮かべる。この容器の使い道とはまた別に、多くの人がこの壺をふと眺めて楽しんだかと思う。



330



329

図-330 ラベル。「土坑墓<sup>82</sup>出土品 微隆起線文を直線あるいは曲線状に配置する続縄文時代の後北C1式の好資料。墓内から二個(の土器)が直立したまま出土した。また、二十五個の石器と一緒に副葬されてい

たが、すべて故意に折られていた。」

楽しいな文様と優雅なかたち。容器の下半身は注意深く細められ、いくすじもの細やかな線が下に流れる。何かの物のかたちを描いているわけではないが続縄文時代の土器文様は絵を見るようにおもしろい。それは、にぎやかな構成の図柄が多いせいか、あるいは、あさい峰をつらねてつぎつぎに続いていく線のせいか。彼らが図柄に使うのはいつもこのごくめずらしい特長のある線だ。線は並び、流れ、ときには大きく面を囲み、集まっては何かを支えて見せる。それらが器の表面をおおって不思議な立体感をかもしだす。しかし、線の表現としては非常に範囲のせまい、一面、融通のきかないものだ。なにがこういう方向へ向かわせたのか知りたいと思う。

図-331 ラベル。「口縁部に8つの突起を持った土器。」

突起と突起を結ぶ断面三角形の微隆起線が軽やかに施されている。土器の下半分を欠いているが、この地域の縄文早期土器の特徴をよく示している。」



331

その隆起線文は、口辺を取り巻くように垂らした半円のように見える。しかし、近づいてみるとそれはいくつかに分かれた線が続いておかれているものなのだ。これは半円を描いたものではなく、こんなふうが続いていく何か（と何か）を表したものである。半円状のものはそれぞれの突起の間にも渡されて大小二重の飾りとなっている。われわれはよくこつした飾り付けを楽しんだりするが6千年前の彼らの場合は楽しみながらもそれとまったく同じではないのかも知れない。

すでに午後三時を過ぎたので、釧路方面へ移動する。虹別キャンプ場に着くのが遅くなるかもしれないので連絡をする。到着してそこからもう一度連絡をすると係の者が出向くという。まだ明るいうちにどうやらキャンプ場に着くとセンターハウスはすでにしまっていた。すぐ係の男性に来てもらってサイトに落ちつくことができた。車内を整理しているところへ受付をしてくれた男性がやってきて「ツルがいる。」という。一緒にキャンプ場の脇を流れる沢に行く。彼の指さす方に目をこらすと、

茂みの向こうに白い鳥の姿が見える。一羽。あたりがもう薄暗くなっていて姿形はよく見えない。鳥はほとんど動かない。暗くなって雨も降ってきたので戻る。タンチョウはこの根釧台地で繁殖する。一年を通じて見られるのは国内でこの地方だけだという。

十八日（水）雨。濃霧。 キャンプ場 釧路博物館

厚岸町郷土館 達古武キャンプ場

朝から雨。ツルが来ているかと念のために沢に出てみるが姿はない。釧路市博物館を目指す。釧路に近づくと車が多くなり、車列はたびたび止まる。市内に入ったのは昼近くだった。博物館は広い公園を前にして中央に正面玄関を開く双翼の建物。いまは、細かい雨と共に降りた霧に包まれている。展示は落ち着いたレトロな雰囲気。しかも、内容は豊かでかなり専門的だ。しかし、これが土器の展示となると昔風で、土器本来の自然な雰囲気は欠く。狭いガラスケースの中の、ほの暗い明かりのもとに置かれた何か貴重な物。小さなケースに二つも詰め込まれてそれぞれ耐震用の支え棒に囲まれる。そのケースが隙間もなくいくつも並ぶ。「舟形深鉢・片口」として三つの土器が横たわる。側面の文様を見せるためだが、それ以外の口辺などや全体のかたちはほとんど見ることができない。大事なものは元々この土器はどんなふうに見られていたのか、だが。

それでも、縄文晩期の壺状土器（図332）が、その広がる肩の渦巻文を明らかに見せる。この場合は、のぞき込むことができるガラスケースと上からの照明がさいわいしている。この流れる水のような文様は2300年後のわれわれにもある感銘を与える。それが、たまたまわれわれの好みに合うかたちにすぎないのか、または、かれらの持っていた感覚がまさにわれわれと同じものだったからなのかわからない。いずれにしても、このどこまでもなめらかな線、決して正面からぶつかったり唐突に折れ曲がったりしない線への強い愛着には、いま大いに共感を



332

おぼえる。

厚岸町に向かう道は時々濃い霧に包まれる。どの車もライトを点ける。地図を見ると厚岸（あつけし）湾に接して厚岸湖があつて、それは東から迂回してのびる半島に抱かれたようになっていた。半島の先端は短い橋になって湖を閉じている。また、見方によっては半島などではなく、この湖は湾の奥に狭い出入り口を持つ汽水湖である。厚岸の街に入りその橋を渡つてすすむと道は史跡国泰寺跡に至り、そこに郷土館がある。展示室の周囲は大きな木製ガラス戸をはめた展示ケースになっている。国泰寺についての資料展示によると寺はアイヌの人心を安定させる目的などもあつて1804年に建立され、鎌倉五山の僧が派遣されていたという。「下田ノ沢土器」としていくつかの縄文土器がある。

午後三時を過ぎて、達古武キャンプ場に電話をする。今日は気温がかなり低いので手揉みのインスタントカイロを探す。コンビニでは品切れで、店員は「このところ急に寒さがぶりかえしていてどの店も同じでしょう」という。日用品までそろえた大きな薬屋を見つけてようやく手に入れる。